

巡礼の空間実践のディスクール

ー日本の巡礼を事例としてー

長田攻一（早稲田大学名誉教授）

巡礼地は、もともと都市の日常生活空間から離れて行者が修行するいわば人間の到達を阻むような限界地が選択されていた。それは、巡礼が日常世界とは異質な聖地を目指す行為の一つであることによる。しかしながら、多くの庶民が巡礼に参加する時代になると、その聖地は都市周辺部や都市の内部にも作られるようになる。それらの空間は、聖なる世界と日常空間との境界領域であると考えられる。普段われわれが生活している都市の俗なる空間の周辺部や都市の内部に聖なる空間との境界領域が生み出される過程を、「空間実践」という言葉で表現してみるならば、そこには、人間が環境との関係の中でそのような境界領域空間を生み出す営みが見えてくるのではないだろうか。

H.ルフェーブルは、物理的空間、心的空間、社会空間がそれぞれ支え合う関係を空間の生産と呼び、それを「思考する空間」と「生きられる空間」の相互作用による空間実践としてとらえようとした。都市全体の空間も、日常生活の絶え間ない人びとの身体の動きとデザインされて構築された建築物との相互作用によって生み出されるものであるすれば、そこには空間を生み出す身体動作の規則が見いだされるに違いない。それを空間実践のディスクールと呼ぶことにしよう。M.フーコーは都市の内部に対立しあう空間の存在を想定し、すべての異なる空間領域に異議を唱え、またそれらを反映する鏡のような空間をヘテロトピアと呼んだ。その一例としての巡礼空間は、日常生活と聖なる世界との境界をなす空間の一つとして構成されるとすれば、そこには独特の身体動作の規則が見られるように思われる。日本の巡礼を事例として、寺院や道などの空間デザインおよび具体的な巡礼者の身体動作に注目して、その規則のいくつかの特徴を探ってみたい。